

福澤諭吉『覚』についての考察

諭吉と同時代に生きた肥後熊本藩隊長山川龜三郎

稲垣 房子（中之島図書館）

この度、大阪府立中之島図書館に左記の資料を寄贈するにあたり、この資料とそれに関する人物について述べてみたい。

覚

一金式拾五両也

右は千八百六十七年式英兵

練法翻訳料百式拾五両

之内金として前書之高

髓二請取申候 当年中

訳書出来候丈ケ七八拾枚

差上、尚又来正月二十日頃

七八拾枚差上可申、金子之義

ハ其都々御遣し可被下候

以上

十二月廿三日 福澤諭吉

*三箇所「福澤諭吉」角印の押印あり。



このちいさな（二八cm×一六cm）書付は筆者の実父山川信夫が持っていたものである。所有していた信夫も他界し、そのままにしておくのも良くないと、若干の調査をした。山川信夫（一九九四年没）は熊本県上益城郡益城町安永の出身で、生前から「福澤諭吉の書付がある。」と言っていた。信夫の書き残したものと等から調査したものである。

第一章 福澤諭吉『覚』から考察したこと

福澤諭吉の真筆であるか？

確かに「福澤諭吉」とは読めるがほんのちいさな一枚の書付であり、虫喰いもあり、保存状態はよくない。福澤諭吉の残された他書簡等と比較してもから筆遣いは福澤のものと思われる。

何年の書付か？

「十二月廿三日」という日付は何年のことであろうか？年末から年明けにかけて翻訳の作業が進んでいることを記述している。「千八百六十七年式」とあるので、当然その後であるが、一八六七年はすなわち慶応三年一月に、福澤諭吉は幕府の軍艦受取委員の随員・通訳として二回目の渡米を果たし、六月に帰朝、多額の資金を用意し多くの書籍を買ってきている。帰国の七月には渡米中の摩擦が嵩じて謹慎を命ぜられ、塾の教科書用と仙台藩と紀州藩のために大量に購入してきた洋書が、神奈川奉行のもとで差し押さえられたが、十月には謹慎処分は解除となり、荷物も年が明けた一八六八年には新銭座の塾に引き取られた。四月には諭吉が新銭座の英学塾を「慶應義塾」と名づけ、塾経営と翻訳・著述に専念した年である。その九月八日に明治と改元された。

後に述べる熊本藩の状況、新政府兵部省などの時代背景から見ると一八六七年から一八七〇年までの間と考えられる。

◇「千八百六十七年式英兵練法」とはどの翻訳書のことか？

この『覚』に記されている「千八百六十七年式英兵練法」が翻訳作業は諭吉が訳したのではなく、事務的に請け負ったものと考えられる。

福澤が翻訳を請け負っていたことについては、『福澤諭吉書簡集』第一巻（岩波書店、二〇〇一年）の巻末にある「英字新聞の翻訳」（三七五頁）というコラムにも書かれている。

中津藩の小幡篤次郎（中略）ら六名を呼び寄せて塾生としたのは、元治元（一八六四）年のことであった。新聞の翻訳はこれらの塾生を養うための金策のひとつであったという。それは福澤にとつての洋学塾経営の必要と、諸藩にとつての情報収集の必要との間に始まったことになる。

翻訳原稿の筆写については、中津藩三輪光五郎の談話が残されている。

「多分横字新聞か雑誌の翻訳でせう、政治経済兵器等に関する翻訳の原稿を、一月何回か十冊ばかり、中津から来た学生が九人か十人で写しました。一冊は十行二十字詰で十五

六枚もありましたらう、これを急いで写すのですが、書いてある事柄はこれまで見たことも聞いた事もないことばかりですから、写すのにも手間が取れます。(中略)其十冊の写本を先生はどう処理されたか分かりませんが、浜町の熊本藩邸に居た国友某といふ人などは、其配布を受けたやうです。そして写字を命ぜられるのは、中津の学生に限っていました。」

また、翻訳料の相場は「五三山口良藏宛書簡慶応四年六月七日付」(一〇〇頁)では、訳書の種別によるページあたりの翻訳料を提示している。

「一、兵書。窮理書。地理書。舎密書。新聞紙之類 十行二十字之訳書壹枚ニ付 代金壹両
一 政治書。経済書。万国公法。兵制論等 都て議論文、同断ニ付 代金壹両三分

右之通何時ニても、日を限り無相違翻訳仕候」(『福澤諭吉書簡集』第一巻より)

「覚」によると翻訳料は百弍拾五両という大金であり、七八拾枚に分割しているという分量としてもある程度まとまった訳書と考えられる。金銭の管理は厳密であつた福澤が、一時金にも「覚」としたため押印したものであろう。

ちなみに、熊本藩からの依頼で翻訳をしたことは、会田倉吉著「福沢諭吉」(吉川弘文館 人物叢書新装版一六九頁)に記述がある。

「明治元年の入学(慶應義塾・筆者補記)者数は一〇三名、それから二年が二五八名、三年は三二六名というような勢いで、そのため同二年には、熊本藩から頼まれて翻訳した『洋兵明鑑』五冊何百部かの買い上げ代金六〇〇両で、二階建講堂一棟を増築したほか・・・」

問題の「千八百六十七年式英兵練法」が、この『洋兵明鑑』にあたるのかどうかは確認できてない。

他に『洋学史事典』日蘭学会編 (雄松堂出版 一九八四年刊)の記述を参考に以下の二書が候補として挙げられる。

「英国歩操新式」橋爪貫一訳 三巻五冊 明治元年(一八六八年)刊

原書は一八六二年の制定なるものを、スナイドル元込銃の採用によって一八六七年に改正した英国陸軍の歩兵操練書 Field Exercise and evolution of infantry. であり、1. 生兵・小隊教練、2. 中隊教練、大隊教練からなる。

「英国歩兵練法」赤松小三郎訳 八冊 慶応元年(一八六五年)刊。

原書は Field Exercise and Evolution of Infantry. の一八六二年版を基に一八六四年を用いて補入している。内容は、1. 生兵・小隊、2. 中隊、3. 施条銃使用法、4.

同上、5・大隊、6・同上、7・大隊運動、8・軽歩兵兵で、他に一八六四年版を用いた慶応四年版があり、別に慶応三年（一八六七年）刊の『重訂英国歩練法』九冊があつて、横隊編と要用の諸件編が追加されている。

一八六七年式と明示しているところを見ると改訂版かと思われる。ところで、福澤は著作権に関して非常に厳格であつたので、右翻訳書であれば、翻訳者との関係はどのように考えるかも疑問が残る。

この翻訳書の特定は今後調査を続けたい。

福澤諭吉『覚』は誰宛に書かれたものか？

福澤諭吉『覚』は熊本藩士山川亀三郎（清房）に宛てて書かれたものと考えられる。

山川亀三郎は『覚』を所持していた、故山川信夫の祖父、つまり筆者の曾祖父にあたる。

亀三郎は幕末明治に肥後熊本（細川）藩の藩兵であり、陸軍の砲兵隊の技術はフランスの将校に学び、海軍の操艦術は英国士官に教わつたそうである。

山川信夫が父（正）から譲り受けたか、亀三郎が建てた熊本の屋敷（上益城郡益城町広安村字安永）を処分した時に保管したものと考えられる。

第二章 山川亀三郎（清房）について

福澤諭吉の生まれは太陰暦一八三四年一月二日生まれであるが、太陽暦でいうと一八三五年（天保五年）一月一〇日にあたる。先に考察した『覚』の受取人と考えられる山川亀三郎の生年は一八三五年といわれるので、ほぼ同年代となる。激動の幕末明治を同年代として生きてふたりのかわりが興味深い。慶応から明治に福澤諭吉とかわりがあつたと推察できる

山川亀三郎のことについて述べてみたい。

以下は山川亀三郎の孫にあたる山川信夫が生前、書き残した著書『山川家の人々』（昭和四五年 教育タイムス）からの引用である。

亀三郎（清房）の生い立ちと軍人としての

経歴

山川家はもと福島正則（広島藩）の家臣



で、七本槍で有名な賤ヶ岳の合戦の際、敵將三人を倒した。福島家が亡びた後、細川家の客分になり、熊本県上益城郡益城町広安村字安永に屋敷を賜り、現在も住民に「山川」と呼ばれる雑木林の一区画が残っている。

山川家の近代の中興の祖は山川清房である。彼は一八三五（天保四）年山川清簾（きよかど）の三男として安永に生まれた。母は津久礼の豪族鈴木家の出であるが、母が二子ある家の後添いに来たために、幼名亀三郎と呼ばれた。（中略）少年時代、熊本藩の塾生となってからは学力衆に秀で、居寮長に選ばれた。その後明治変革期の軍人として成績よく、賞与として金二千疋を戴いたという。浦賀に米艦が来た時、彼は二十歳で選抜されて、肥後藩兵として同地に出兵する際、お別れに津久礼の祖母を訪れた。祖母は畳の上には上げず、腰かけたままで出兵の祝杯をとらせ、「亀三郎は切れる刀をもっているか」とねんごろに尋ねたという。厳格の中にも愛情に満ちたこの賢明な外祖母は、古武士そのままの清房の人格形成に強い影響を与えているようである。

『山川家の人々』より

* 肥後藩は一八五三（嘉永六）年のペリー来航から四日後の六月七日、幕府から相州（神奈川県）沿岸本牧の警備を命ぜられ、藩兵三〇〇名を派遣している。

『熊本県史 近代編第一巻』二六二頁より

肥後藩兵としてであるか、明治政府の軍人としてであるか、時代は不明であるが、陸軍の砲兵隊の技術はフランス将校に学び、海軍の操艦技術は英国仕官に教わったところである。英国の士官官から時計を買う時、金時計も銀時計も中の機械は同一であることを確かめて、銀時計を買い受け、長い間愛用していたが、遠州灘で肥後藩の軍艦が遭難し、彼は陸地に泳ぎついたが、長時間の遭難にも彼の所持する時計だけは狂わなかったと自慢していた。

『山川家の人々』より

* 明治三一（八七〇）年二月、兵部省は各藩の常備兵員を定めた。これにもとづいて肥後藩は、「三月藩士強壯ノ者撰ンデ英式二倣（なら）ヒ常備兵二大隊（中略）予備兵一大隊砲兵二隊（中略）に編制」した。（中略）しかし、この英式常備兵は翌年秋の兵部省の兵制改革方針にもとづいて、仏式に変革されることになった。

『熊本県史 近代編第一巻』二六九頁より

清房は若い頃から、陸軍・海軍の兵術をフランス人、イギリス人について学んだだけ

に、外国語はできなかつたようだが、生活技術はヨーロッパ的なものを早くから身につけ、ぶどう酒を呑み、パンや牛肉を食し、紅茶・コーヒー・マーメイド・トマト等を用いていた。清房の人となりを最も端的に表現するものに、次のことがある。家には三丁のアメリカ製六連発拳銃があつた。屋敷は周辺より少し高く、ちよつと城郭を思わせる感じの地形で、家屋の四方の壁と戸袋には銃眼が作られてあつて、屋敷のどの方向から賊がうかがつても射撃ができるように用意されていた。更に、妻と小さい娘達にはアメリカ製六連発拳銃の射撃訓練をさせたそうで、近くにある自己所有の桑畑の土手に紙に書いた標的をつくり、手を取つて訓練させた。その往復には、暴発しても人に害を与えないために、娘達に、歩兵が小銃をかつぐ形で、短いピストルをかつがせて歩かせたそうである。

『山川家の人々』より

山川亀三郎（清房）と堺事件

山川亀三郎が歴史のひとコマに登場する。幕末大坂の二堺事件である。堺事件と、その際、切腹を命じられた土佐藩士を護送した山川隊長のことを記録した文書は、三つある。一番古いのは、森鷗外の小説『堺事件』『新小説』第一九号第二卷（大正三年二月一日発行）である。これには山川亀三郎を亀太郎と記述している。次いで昭和一二年四月、宝文館刊の寺石正路著『明治元年土佐藩士泉州堺烈拳』（一二九頁）がある。三点目は徳富蘇峰の大著、「近世日本国民史」『明治天皇御宇史』第八冊（明治書院昭和一八年刊、七二頁）である。

堺事件とは一八六八（慶応四）年二月一五日、フランス軍艦デュプレー号水兵の堺市中狼藉により、堺を警護していた土佐藩兵がフランス兵一名を殺傷したものである。明治新政府はフランスの強硬な抗議により、土佐藩士二〇名に切腹を命じ、一週間後の二月二三日、泉州堺の妙国寺が切腹の場と決まった。同時に肥後熊本藩と安芸広島藩に、大阪長堀の土佐藩邸から、土佐藩烈士二〇名を、妙国寺まで護送することが命じられた。その後（細川）藩隊長が山川亀三郎であつた。

森鷗外『堺事件』の記述より

先手は両藩の下役人数で、次に兵卒数人が続く。次は細川藩の留守居馬場彦左衛門、同藩の隊長山川亀太郎、浅野藩の重役渡邊競の三人である。陣笠小袴で馬に跨り、

持鎧を豎てさせている。次に兵卒数人が行く。次に大砲二門を挽かせて行く。次が二十挺の駕籠である。駕籠一挺毎に、装剣の銃を持った六人の兵が附く。二十挺の前後は、同じく装剣の銃を持った兵が百二十人囲んでいる。後押は銃を負った騎兵二騎である。次に両藩の高張提灯各十挺が行く。次に両藩士卒百数十人が行く。以上の行列の背後に少し距離を取って、土佐藩の重臣始め数百人が続く。長径凡そ五丁である。

長堀を出発して暫く進んでから、山川亀太郎が駕籠に就いて一人々々に挨拶して、箕浦の駕籠に戻ってこう云った。「狭い駕籠で、定めて窮屈でありましょう。其上長途の事ゆえ、簾を垂れた儘では、鬱陶しく思われるでありませう。簾を捲かせませうか」と云った。「ご厚意忝う存じます差構ない事なら、さやう願ひませう」と箕浦が答えた。それで駕籠の簾はすべて巻き上げられた。又暫く進むと、山川が一人々々の駕籠に就いて「茶菓の用意をしていますから、お望みの方に差上げたい。」と云った。

両藩の二十人に対する取扱は、万事非常に鄭重なものである。

寺石正路著『明治元年土佐藩土泉州堺烈挙』の記述より

高知県郷土史家寺石正路は昭和一〇年頃、堺事件を調べるうちに、切腹した藩士の遺品類が熊本県の山川家に残されていることを知ることとなり、肥後藩隊長山川亀三郎の娘婿山川正にその閲覧を申しでている。遺品や辞世の句等に接し、大いに感激、堺事件をまとめたその著作の巻頭に「烈士遺墨三葉」として、それらの写真を掲載している。

また、山川亀三郎の縁者徳富蘇峰と事実の確認をする書簡を交換している。同著の巻頭に徳富蘇峰の書簡が掲載されている。

徳富蘇峰先生書簡

(前略)然るに尊著御引用相成候、山川亀太郎なるものは、老生長姉の夫にして、即ち老生の義兄に當り候、山川亀三郎なる者と存候、右は大正の初期春陽堂にて出版したる森鷗外君の著述にも亀太郎と有之、或はそれをご襲用相成候ものかと存候、熊本藩は山川亀太郎なる者無之、然も亀三郎なるものが當時の熊本兵の隊長に有之候、而して堺事件の土佐人士と関係ある次第は同人宅に左の書類等有之候間、何かの御参考に可相成と差出候、即ち竹内弥三郎君の辞世、大石甚吉君の辞世二点、川

合（ママ）銀太郎君の形見の絹の布片、右三種及その人名録差出候、且つ山川龜三郎なる者の身分を証明する為兵部省の辞令一通、熊本藩要人の口上書一通差出候。右の次第に就き、老生の如きも単に熊本県人であるばかりでなく、此事に若干の關係ある者の親類として、最も尊書に向て感謝措く能はざるものに候。勿々頓首
昭和九年十二月初六

蘇峰迂生

寺石先生 玉机下

土佐藩烈士の遺品

堺事件について、龜三郎（清房）は後年次のように述懐している。「彼らはけつして罪を犯した罪人ではない。国家のために一身をささげた国土である。元禄の昔、大石良雄以下の赤穂浪士が細川藩にお預けになった時の故事に習って、丁重に遇した。」と、死を決した烈士達も、山川隊長が指揮する肥後藩士の武士の情けには、十分の敬意を表した。藩士達は、筆・紙・墨を用意して、後日の記念に一筆願いたいと望むものが多く、心得のある烈士の多くが、快くこれに応じた。

山川家には六番隊士大石甚吉の辞世の和歌、八番隊士川谷銀太郎が紋服の小袖を刀で切って、行年、姓名を墨書した絹地、八番隊員竹内弥三郎の辞世の和歌などが保存されている。



君のため死^て亭魂は神となり

早く攘夷のなるを守らん

土藩 竹内弥三郎藤原栄久

山川家では、これらの遺品を大切に保管してきたが、近年になり最もふさわしいと考えられる堺妙国寺に一式を寄贈した。山川龜三郎関連で幕末熊本^の動向をしたためた手紙や文書が含まれる。一八六九（明治二）年六月から翌年五月までの初代熊本藩知藩事を任じられた細川韶邦（よしくに）宛の九月廿五日付太政官文書等興味深い文書が含まれている。

明治期の亀三郎については以下の文章がある。「肥後藩隊長亀三郎は、同藩錚々の人物にして、明治三年練兵を天覧に供する時、藩兵の連隊司令となり、兵部省より下文の感状を給わる。曰く、熊本藩山川亀三郎先般練兵天覧之の節聯隊司令申付候處勉勵盡力候に付目録之通差遣候事、庚午五月兵部省と以つてその人格閱歴を徴する。」、『明治元年土佐藩土泉州堺烈學』より

亀三郎の妻常子は徳富一敬^三の長女／徳富蘇峰・蘆花の姉

前述の徳富蘇峰の書簡にあるように、山川亀三郎の妻常子は蘇峰の長姉にあたる。彼らの母久子は上益城郡益城町の矢鳥家の出身で、久子の姉は熊本県女子教育につくした竹崎順子、妹津世子は横井小楠に嫁ぎ、妹ひとり矢嶋楯子は日本基督教婦人矯風会創設した。常子も早くからキリスト教に帰依をしており、亀三郎の死後（明治三七年没）は父母・一敬と久子の看病のため上京し、山室軍平の救世軍に入隊し、佐々木信綱門下に入り歌集も出している。また、若い時に学資の面倒を見てくれた長姉のために蘇峰・蘆花から著作や国民新聞は全部送られてきていたので、家族で良く読んでいた。

亀三郎（清房）は広島勤務の時、同藩の雨森ミツ子と結婚した。妊娠した妻を肥後の実家に送り届けたが、長女磨智（まち）は実家で生まれ、事情は分からないが、最初の妻とは間もなく離婚している。清房は若い時から経済的に苦労して育ったので、兄二人と違って質素倹約で、軍人としての俸給も貯蓄し、退職の時の一時金と合わせると、相当の財力の余裕があったようである。清房の特異な経歴と財力は地方では注目的となり、この地方の豪族である津森村の杉堂の矢鳥直方は、徳富常子との再婚の世話をした。常子は水俣の徳富一敬の長女であるが、一度結婚して一女を生み、離婚して家に帰っていたのである。



常子

大江義塾時代の猪一郎（蘇峰）は長姉の結婚のために、清房との折衝等の役割を果たしたようである。二人は木山の『丹波屋』

の二階をかりて家庭をもち、それまでに雨森家に預けてあった長女磨智を引き取った。明治一五、六年頃に、安永に屋敷を求めて家を建てた。『山川家の人々』より

幕末から明治にかけての熊本の地で新しい時代を築いていった群像の中に若い日の山

川龜三郎が果たしたであろう軍人としての働きが、このちいさな書付に見ることができ
かもしれない。

参考文献

- 寺石正路著『明治元年土佐藩士泉州堺烈拳』（宝文館昭和一二年四月）
蘇峰徳富猪一郎著「近世日本国民史」『明治天皇御宇史』第八冊（明治書院 昭和一八年）
『熊本県史近代編 第一巻』（熊本県 昭和三六年）
山川信夫編著『山川家の人々』（教育タイムス 昭和四五年）
森林太郎『鷗外全集第十五巻』（岩波書店 昭和四八年）
日蘭学会編『洋学史事典』（雄松堂出版 昭和五九年）
会田倉吉著『福沢諭吉』（吉川弘文館 人物叢書 新装版昭和六〇年 一六九頁）
慶應義塾編『福澤諭吉書簡集第一巻』（岩波書店 平成一三年）

注

- 一 赤松小三郎は江戸時代後期洋学者で英国兵書の翻訳で知られるが、慶応三年九月京都で暗殺される。
二 「王政復古直後の攘夷事件。慶応四年（一八六八年）二月十五日、当日堺に入港したフランス軍艦水
兵が上陸し周辺住民に乱暴を働いたため、同地警備の土佐藩兵が襲撃し十一名を殺傷した事件。この
ころこつした事件が相次いだ、成立したばかりの新政府は外国と事をかまえる不利を考えて、箕浦
猪之吉（隊長）以下二十名（うち九名は、フランス艦長の申し出により助命）の土佐藩士に切腹を命
ずるなど、フランス側の要求をすべて認めた。」（世界大百科事典より）
三 徳富一敬は横井小楠の高弟であり、小楠が一八六九年に暗殺された後、相弟子の竹崎律次郎は明治維
新の際、細川藩から熊本県への藩政改革に取り組んだ。